

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2012年9月NO.28

SMILES

<http://www.childfund.or.jp>



シリーズ“遊び”

2

草野球

フィリピンで草野球をして遊ぶ子どもたちに出会いました。女の子も男の子と一緒に遊んでいます。木の枝がバットに、縛って丸めた布がボールに、ビーチサンダルがホームベースに早変わり。ホームランを狙ってひと振り!

写真: センター30(ギマラス州ブエナビスタ)

ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。



～ スポンサーシップ・プログラムを支える人々 ～

その5

チャイルド



～ スポンサーシップ・プログラムを支える人々 ～

その5

チャイルド

「スポンサーシップ・プログラムを支える人々」というテーマで、2011年9月から「支援センター」、
「スポンサー」、「国別事務所」、「チャイルドの家族」を特集してきました。本テーマの最後にご紹介するのは、
「チャイルド」です。スポンサーの皆様の温かいご協力を通して、支援センターが提供するプログラムは、
チャイルドの成長を支え、チャイルドの可能性を引き出します。今号では、スポンサーシップ・プログラムに
よって生き方が変わった元チャイルドと、命を救われたチャイルドをご紹介します。

自分の可能性を 引き出したアンドリュー

■ いつもと違った母

イロイロ州カリノグ町にある私立ハイスクールで科学を
教えているアンドリューは、自分がハイスクール1年生だった
時のある経験を忘れることができません。当時アンド
リューは喘息の発作に苦しんでいました。父親は田んぼで
日雇いとして働いていましたが、得られる収入では家族
8人の食事にも事欠く状況でした。喘息の薬を買う余裕は
なく、ひとたび発作が起これば、おさまるまでじっと耐えるしか
なかったのです。

しかし、その日は違いました。朝から喘息の発作で苦しんで
いたアンドリューは、いつものように「休んでいなさい」と言われ
るのではなく、母親の背におぶさるよう促され、隣町へ
連れていかれたのです。小さな事務所で母親とアンドリュー
は、支援センターのワーカーからいろいろな質問を受けました。
事の成り行きが十分に理解できない彼は、母親がワーカー
の同情を引こうと喘息に苦しむ自分を見せびらかしている
のではないかと思いました。その「面接」がチャイルドとして受
け入れてもらうために必要なことだったと理解するにはしばら
く時間がかかりました。

■ 将来への展望

面接を経てチャイルドとなったアンドリューは、教育支援を
受けると共に、健康診断で「喘息」と正式に診断され、喘息
薬の支援も受けられるようになりました。発作のために
しばしば休まなければならなかった学校にもきちんと通える
ようになったアンドリューは、ハイスクールでひとりの教師と



アンドリュー、自宅の前で。

出会います。「ママ・チャリー」と呼ばれ、生徒たちの人気を
一手に集めていた英語教師です。生徒たちの話を良く聞いて
くれるママ・チャリーにアンドリューは大きな憧れを持ち、
いつしか自分も教師になりたいと思うようになりました。

■ 教員資格試験で良い成績を

教育学を専攻したいと強く希望していたアンドリューは、
大学進学後もチャイルドとしてスポンサーの支援を受け
られることになりました。彼にはひとつの目標ができました。
「スポンサーや支援センターのスタッフ、ママ・チャリー、
そして苦勞しながら自分を育てて
くれた両親に恩返すため、教員
資格試験で良い成績をおさめたい。」
そして、与えられた機会を活かそうと
必死に勉強に打ち込んだアンド
リューは、卒業後の教員資格試験で
全国7番目の成績をおさめたのです。



大学卒業時、
自信に満ちた表情。

■ マム・チャリーのように

全国で7番目という優秀な成績だったこともあり、アンドリューは自宅から20キロ離れた町にある私立高校で教師の職を得ることができました。

教師として安定した収入を得られるようになったアンドリューは、弟と妹の学費を支援しています。これは家族にとって大きな支えです。アンドリューの今の目標は、ハイスクールで出会ったマム・チャリーのように、生徒たちに親しまれ、信頼される教師になることです。



アンドリューが教師として働いているハイスクール。



いつかは自分もマム・チャリーのようにになりたい。

命を取りとめたプリンセス

■ 突然の連絡

2011年9月のある夜、支援センターのワーカーの携帯電話にメールが届きました。メールの送り主は支援センターの活動地域のリーダーです。メールは、チャイルドであるプリンセス（小学3年生）が町の病院に入院して、母親のピンキーさんが泣きながら助けを求めていることを知らせていました。



上／竹やニッパやしで作られたプリンセスの家。電気や水道はない。

右／「あの時はプリンセスが死んでしまうと思った」と話す母親のピンキーさん。



■ 厳しい家族の生活

プリンセスは母親のピンキーさん、妹、二人の弟と生活しています。生活状況が厳しいということで小学1年生の時、スポンサーシップ・プログラムの支援を受けることになりました。父親は三年前、稼ぎの良い仕事を探すためにマニラへ行き、しばらくは仕送りがありましたが、ここ一年は連絡も途絶えています。

プリンセスは体のだるさと痛みを数日間訴えていました。熱もあります。母親は、「学校を休んで、寝ていなさい」と、娘の様子を見守りました。しかし一週間たっても良くならなかったため病院へ連れて行くと、「レプトスピラ症」※1と診断されました。医師は、診療体制が限られているこの病院では手に負えないこと、20キロ離れたイロイロ市にある総合病院へ転院することがプリンセスの命を繋ぎとめる唯一の方法であることをピンキーさんに説明しました。

しかし、この病院への治療費も払えないピンキーさんに転院させるための移動の費用や、総合病院での医療費を捻出する目処は全くありません。ピンキーさんは、このまま娘が（次ページにつづく）

※1

病原性レプトスピラを原因とする人と動物の共通感染症です。風邪症状のみの軽症型から、黄疸・出血・腎不全までを伴う重症型まで様々な臨床症状を示し、重症型については「ワイル病」と診断されます。典型的には、3～14日間の潜伏期間の後、発熱・悪寒・筋肉痛・結膜充血などが生じ、その後重症化すると黄疸・出血傾向などがみられます。

（東京都感染症情報センターのウェブサイト参照）

死んでしまうのではという恐怖に襲われました。お金がないため転院ができないということを知った医師は、ピンキーさんに、プリンセスの入院継続を希望すること、万が一の場合も医師に賠償を求めないという「証書」に署名を求めました。そんな中、ワーカーの連絡を受けたセンター長のフェリーさんから病院に電話が入りました。電話口でピンキーさんは、「総合病院に転院させないとプリンセスは助からないと言われている、どうしたら良いか決めて!」と、涙声で訴えました。

■「命を救うことが最優先」

フェリーさんは応えました。「落ちついて。プリンセスの治療を決めるのはセンター長やワーカーではなく母親のあなたですよ。転院を希望するなら支援できる可能性があるから、心配しないで。」

母親が転院を希望することを確認したフェリーさんは医師に「支援センターがプリンセスの医療費や転院の費用を支援できるので『証書』を破棄してください」と依頼しました。また、チャイルド・ファンド・ジャパンのフィリピン事務所の担当スタッフに電話で状況を報告しました。「チャイルドの命を救うことが最優先、出来るだけの特別医療支援^{※2}を組み立てるように」と指示を受けたフェリーさんは、早速、二人のワーカーを病院へ派遣しました。プリンセスをイロイロ市内の総合病院へ搬送し終わったワーカーたちが事務所に戻った頃には、朝日が昇りかけていました。

総合病院に入院したプリンセスは、抗生物質による適切な治療を受け、10日後に退院することができました。



小川の横に作られている水汲み場。医師は、この水がレプトスピラに感染した動物の尿で汚染されていた可能性を指摘した。今は、煮沸して飲料にしている(ただし、経口的だけでなく、経皮的に感染することもあるので、感染リスクは消えていない)。



弟や妹と
元気に遊ぶプリンセス。

※2

「子どもの成長支援プログラム」のもと、教育、保健、栄養改善などの支援が提供されている。しかし、プリンセスのケースのように、通常の支援では対応が難しい場合には、フィリピン事務所の承認のもと、特別支援が提供される仕組みとなっている。

■「先生」になりたい

命を取り留めたプリンセスは元々栄養不良だったこともあり、センターは、栄養を強化したビスケットとミルクを学校の休み時間に提供しました。

この補食プログラムが功を奏してプリンセスは少しずつ元気を取り戻し、今では妹や友達と活発に遊ぶことができるようになりました。プリンセスの今の夢は、学校の先生になることです。



スポンサーからのカードは大切な宝もの。



チャイルド一人ひとりの成長を守る支援センターのスタッフ。
中央で座っているのがセンター長のフェリーさん。

厳しい環境の中で生活するチャイルドたちですが、スポンサーの皆様の温かいご協力により、教育、保健、そして医療支援の機会を得て成長し、夢を持ち、自分の可能性を引き出しています。そのようなチャイルドたちを引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

事務局長 小林毅

友結ファーム ~野菜が結ぶ人と人~



「いい天気だから家にいるのは嫌だけど、行く所がないからね。」
コミュニティファームを開始して間もないころ、仮設住宅団地に隣接する畑の前で女性の声が入りました。振り向くと、農作業用のエプロンを身に着けた団地の方が腰に手を当て、畑を眺めている姿がありました。

大船渡市猪川町の長洞仮設住宅団地(308戸、居住者約800名)は、入居者が被災前に住んでいた地域が多様で、お互いを知らない人同士が多く集まってできた市内最大の仮設住宅団地です。その団地で、チャイルド・ファンド・ジャパンが活動をサポートする「友結ファーム」は、「友を結び」、「人のつながりを広げること」を目的として運営されている共同菜園です。

2012年2月から始まった友結ファームは当初、「実現や継続が難しい」と活動に難色を示す方もおり、参加者数が伸び悩んでいました。しかし、友結ファームの情報が広まり、口コミで仲間が増えると、参加者で構成する運営組織もでき、人の輪が広がり始めました。6、7名だった参加者が今では毎回10数名集まるようになり、収穫した野菜を団地内で販売するまでに至っています。7月のじゃがいも収穫時は、「今日も完売だったよ」と、猛暑のなか笑顔で一生懸命汗を流す方、「他の野菜はまだ?」と、収穫を心待ちにする団地の方の姿も見られ、多くの交流が生まれています。



収穫したじゃがいもやトマトとともに記念撮影。

害虫がつかないように、
発芽当初から成長を
注意深く見守る。



トマトやピーマン、かぼちゃなど様々な野菜が実るこのファームは、まるで団地に住む方々のように多様です。野菜の色、形、味がそれぞれ違うように、異なる個性を持った方々の「つながり」が広がることを目指し、活動をサポートして行きます。

「夏祭り」は大盛況!



会場には「水ヨーヨーつり」もオープン。
「あの色がほしい!」と、子どもたちに大人気!

チャイルド・ファンド・ジャパンは、学校法人青山学院などと協力して、8月14日(火)と18日(土)、岩手県大船渡市内の2カ所の仮設住宅団地で「夏祭り」の開催を支援しました。

そのうちの1カ所、杉下仮設住宅団地(同市三陸町越喜来)で実施された「第二回納涼盆踊り大会」(14日)は、昨年と同様、自治会の青年企画部である「あそと48」と共に企画され、仮設住宅団地の住民のつながりを強化し、昨年以上に近隣の住民との交流を図ることが目的でした。当日は200名以上が参加して、焼き鳥や焼きそばなどの屋台の味に舌鼓をうつとともに、「ハー、さくら咲いた咲いた、パツとパツと咲いた」とリズムよく始まる

『さくら音頭』を皆で踊って、盆踊り大会はたいへん盛り上がりました。

また、テーブルクロスの上に置かれている缶飲料を倒さないようテーブルクロスをいっきに引きぬく「テーブルクロス引き」ゲームには、子どもから大人まで大勢が挑戦し、会場は声援と拍手に包まれました。

仮設住宅団地内はもちろん、近隣住民との「つながり」も確実に強まった一日でした。



仮設住宅団地内外からの参加者で
「さくら音頭」は大にぎわい。

東日本大震災緊急・復興支援事業は、2013年3月末をもって事業を完了いたします。これに伴い、東日本大震災緊急・復興支援へのご寄付の受け付けを2012年9月30日をもって終了いたします。

スリランカから vol.13 アーユボーン



アーユボーン:シンハラ語で「こんにちは」

エクストラ クラス

チャイルドからの手紙に、「エクストラ クラス (Extra Classes) に参加しました」と書かれているものがあります。どんなクラスなのでしょう？

エクストラ クラスは、子どもたちが「勉強は楽しい!」と実感することで、成績を向上させ、学校へ通い続けることを促すプログラムです。対象は5年生～11年生(10歳～16歳*)のチャイルドたちで、希望すれば誰でも参加できます。このクラスで勉強する教科は算数、理科、英語。放課後や土曜日に、学校の教室や、地域の「子ども学習センター(プログラムを実施する建物)」で行われます。特別な教材は使わず、年度初めにプログラムから支給された教科書などを用います。

現在、スリランカのプッタラムエリアでは約150名の子どもたちが参加しています。チャイルドたちが勉強する意欲を高め、より良い未来を切り開くために、スポンサーの皆様のご支援が役立てられています。

*年齢は目安です。家庭の事情などで就学が遅れている子もいます。



「分からない勉強もみんなで一緒にやると楽しい!」
放課後のエクストラ クラスに参加する6年生～8年生のチャイルドたち。

ネパールから ナマステ! vol.8



ナマステ:ネパール語で「こんにちは」

今日は、バザールの日



チャイルドたちの暮らすラメチャップ村では、毎週木曜日に、村の中心にバザール(市)が立ちます。木曜日の朝になると、まだ薄暗いうちから、人々が野菜などを担ぎ、徒歩やバスでバザールに集まってきます。バスの屋根まで、人やヤギでいっぱい。

バザールの一角では、豚や水牛が解体されます。メインストリートの両側には露店が立ち並び、新鮮な野菜や果物、米、豆類、肉、カレーに使うスパイスをはじめ、衣料品やクツ、水瓶やたらといった金属製品など、あらゆる日用品が売られています。散髪屋や仕立て屋も店を開きます。9時ごろになると買い物客も増え、あちこちで取引が始まります。

学校も木曜日は午前中で授業は終わり。午後からバザールで親のお手伝いをする子どもたちもいます。あれ!午前中なのに、バザールに支援チャイルドを発見。露店のお手伝いだって?週に1度の大切な稼ぎ時、家族の一員としてしっかりと仕事を分担しているのです。



村のメインストリート。奥地から人と家畜を屋根まで乗せたバスが到着。



カゴにカリフラワーがいっぱい。露店ではオレンジや大根を売っています。



肉を売るコーナー。水牛の肉は1kgあたり150ルピー(約150円)。ネパールでは決して安い値段ではありません。

現在、チャイルド・ファンド・ジャパンが支援しているプロジェクト

- 【フィリピン】
 - ・子どもが読書に親しむプロジェクト
 - ▶ パラワン少数民族生活改善プロジェクト
 - ・協同組合強化支援プロジェクト
- 【ネパール】
 - ・子どもにやさしい学校環境整備プロジェクト

「パラワン少数民族生活改善プロジェクト」

パラワン族の人々の生活・意識の変化

- 協力期間：2003年6月1日～2012年9月30日
- 支援対象：パラワン州ブルックスポイント町に住むパラワン族450世帯
- 協力団体：AMP-IPM*(Augustinian Missionaries of the Philippines Indigenous Peoples Mission)

*カトリック修道会であるフィリピン・アウグスチノ宣教会が行う社会事業部門で、少数民族パラワン族の文化継承、保健・栄養改善・教育活動を行う

本プロジェクトは、2003年より、パラワン族の人々の生活改善と、意識の変化を目指して実施してきました。今回は、第3期3年目上半期(2011年10月～2012年3月)報告から、その活動状況をお知らせします。

幼児教育では、54名の子どもたちが、読み書きなどの基礎教育を受けました。また、民族の伝統文化を伝える住民ボランティアから、毎週、パラワンに古くから伝わる物語や詩を学びました。さらに、約100名の子どもたちが補食プログラムとマラリア検診を受けました。

成人教育では、識字教室に172名が入学、46名が卒業しました。マラリア予防の啓発、病気やむし歯の治療、医薬品の支給などの医療支援も実施されました。生物多様性保全活動では、住民の森林警備員15名が、今でも貴重な自然が残る地域の特性をいかして、野生動植物保護区の設置について検討しています。

指導者育成として、住民の森林警備員に対して、先住民の法的権利などについて学ぶパラリーガル研修、また、伝統文化指導や、ボランティア教員の育成研修が行われました。

本プロジェクトも残すところ6か月となりました。9年間におよぶ支援によって、パラワン族の人々は自分たちの土地が貴重な動植物の宝庫であることへの誇りや、先祖代々受け継がれた土地を子孫へ伝えていく使命をより強く感じるようになりました。生活改善のためのさまざまな活動が、住民ボランティアによって今後とも持続されるよう、残る期間も活動の充実を目指します。



生物多様性に関する研修の様子。

緊急支援 「フィリピン台風被害支援プロジェクト」

生活を立て直すために

2011年12月16日から18日にかけてミンダナオ島を襲った台風21号(国際名Washi;現地名Sendong)により、チャイルド・ファンド・ジャパンが関係する2つの地域が甚大な被害を受けました。

250名のチャイルドと家族が暮らすカガヤン・デ・オロ市(センター48)と、2004年まで支援していたイリガン市です。カガヤン・デ・オロ市では、支援を受けていた小学1年生のチャイルド1名のほか、4歳の男の子を含む7名が依然として行方不明です。イリガン市では、元支援地域がほぼ完全に流され、元チャイルド家族161世帯が被災し、元チャイルドを含む103名が命を奪われました。

行政を含む多くの支援が活発化する中、現地スタッフは支援が重複しないように関係諸機関と調整し、被災した人々に緊急支援物資や学用品の配布、心のケアなどの支援を行いました。

かつてスポンサーシップ・プログラムを通して組織された協同組合も壊滅的被害を受けたイリガン市では、家屋再建を住民たちが協力して進められるよう、パヒナ*・グループの組織化に着手しました。家屋の設計や資材の購入計画の調整などに時間がかかり出足が遅れましたが、6月中旬までに2棟の家屋が完成しました。

*「パヒナ」とは、「共同で作業する」という意味のセバアノ語です。



住宅再建の様子(イリガン市)。

インフォメーション コーナー

お知らせ

今年も「グローバルフェスタ JAPAN2012」に参加します!

国際協力に関わるNGO、政府機関、企業などが一堂に会する国内最大級の国際協力イベント、「グローバルフェスタJAPAN2012」に今年も参加します。フィリピンや、ネパールの支援活動や、東日本大震災緊急・復興支援事業について最新情報を含めてご紹介いたします。是非ブースにお立ち寄りください!

- 場所: 日比谷公園 (東京・千代田区)
- 開催日: 10月6日(土)、7日(日)
- 公式ホームページ: <http://www.gfjapan.com/>



昨年の様子。280団体以上が参加、10万人以上が来場しました。

お知らせ

東横INN全店舗がチャイルド・ファンド・ジャパンをPR!

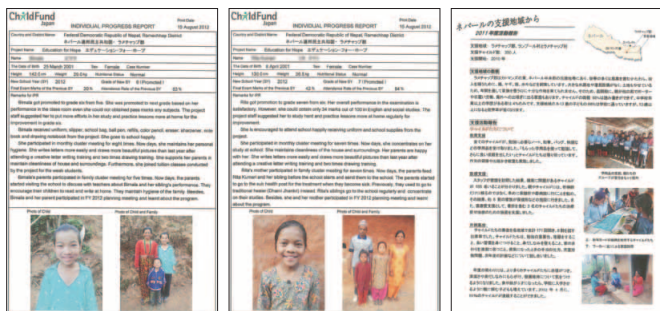
株式会社東横インは、約250の国内全ての店舗でチャイルドをご支援くださっています。また、ホテル館内にポスターを掲示し、フロントにパンフレットを設置して、スポンサーシップ・プログラムを紹介しています。9月からポスターとパンフレットがリニューアルされます。東横INNをご利用の際は、是非パンフレットをお手に取ってご覧ください、お知り合いの方にお勧めください。



ご報告

ネパールのチャイルドの成長記録を発送しました

ネパールのチャイルドをご支援くださるスポンサーの皆さまには、チャイルドの成長の記録を8月中旬までにお送りいたしました。ネパールでのスポンサーシップ・プログラムが始まってから2年目の成長記録です。チャイルドや親を対象とした集会の回数を重ね、支援を受ける家族の生活に少しずつ変化の兆しが見られます。成績があまり優れないチャイルドもいますが、一人ひとりの成長ぶりと家族に表れた変化をご確認ください。



お知らせ

“Small Voice Big Dream 2012” (小さな声 大きな夢) 調査を実施します。

「小さな声 大きな夢」調査は「子どもたちの正直な気持ち」を知るために、チャイルド・ファンド・アライアンスが2009年に開始しました。昨年は44カ国の10歳から12歳の4,600人の子どもたちがこの調査に参加してくれました。「あなたがもし、国のリーダーだったら、子どもの生活をより良くするために何をしますか?」など、6つの質問を子どもたちに答えてもらいます。今年には日本国内でも実施し、杉並区内の80名の小学生が調査に協力してくれました!

調査結果は11月20日の「世界子どもの日」に、チャイルド・ファンド・アライアンスに加盟する12の団体から一斉に発表されます。チャイルド・ファンド・ジャパンも、機関紙やホームページでご報告します!



お知らせ

東日本大震災緊急・復興支援事業、寄付受付終了のお知らせ

震災直後から実施している東日本大震災緊急・復興支援事業は、2013年3月末をもって事業を完了いたします。これに伴い、**東日本大震災緊急・復興支援へのご寄付の受付を2012年9月30日をもって終了いたします。**多くの方々からご支援をいただき、様々な支援プロジェクトを実施しています。皆様からの温かいご支援に、改めて厚くお礼申し上げます。

お詫び

2011年度年次報告書 誤植のお詫び

7月に皆様にお送りしました年次報告書に以下の誤植がありました。お詫び申し上げますとともに、訂正いたします。

13ページ 特定非営利活動に係る事業会計収支計算書の表内
1行目: 誤) 収支の部 → 正) 収入の部
下から3行目: 誤) 当期繰越収支差額 → 正) 当期収支差額

14ページ 特定非営利活動に係る事業会計正味財産増減計算書の表内
下から3行目: 誤) 【当期正味財産増加額】 → 正) 当期正味財産増加額

ChildFund Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う12団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

スマイルズ

<チャイルド・ファンドより SMILES> 2012年 9月発行

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
理事長 深町正信 事務局長 小林毅
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: childfund@childfund.or.jp
URL: <http://www.childfund.or.jp/>

(デザイン) モステデザイン研究所 (印刷) 有限会社東西印刷



大豆油インキを使用